

バンキング・バナナ・スキン 2010

Summary

このレポートは、金融市場が前例のないストレスのもとにある 2010 年を迎えるに際して、銀行業界のリスクに関する展望を示しています。このレポートは、440 名以上の銀行関係者、規制当局者等銀行を間近で観察する方々から頂いた回答にもとづくものです。

最大のバナナスकिनは政治的関与

自国銀行を危機からの救出を目的とする政府の迅速且つ強力な施策によってシステムの崩壊は食い止められたものの、その結果として銀行業界は政治の強い関与のもとに置かれ、これが本調査回答者にとって銀行業界の直面する最大のリスクの根源であると認識されるに至っています。

リスクの形態としては、**政治的関与**(今回初めてバナナスकिनに登場)は多くの側面を持っています: それは商売上の判断を歪め、モラルハザードを発生させ、何時どのようにして金融支援が引上げられるかに関して不確定要因を発生させます。危機に対する過剰反応による**規制過多**(第 3 位)はこれと緊密に関連したリスクです。

今回のバナナスकिन調査で明らかになったのは、それが全ての主要銀行市場共通の問題であり、銀行関係者と銀行以外の回答者双方に共通の問題であるということです。

バンキング・バナナ・スキン 2010

(括弧内は 2008 年の順位)

- 1 政治的関与 (-)
- 2 信用リスク(2)
- 3 規制過多(8)
- 4 マクロ経済動向(5)
- 5 流動性(1)
- 6 資本調達(-)
- 7 デリバティブ(4)
- 8 リスク管理の質(6)
- 9 クレジットスプレッドの変動(3)
- 10 株価変動(7)
- 11 為替の変動(13)
- 12 企業統治(コーポレートガバナンス)(16)
- 13 商品価値の変動(12)
- 14 金利の変動(9)
- 15 不正(11)
- 16 経営者のインセンティブ(17)
- 17 新興市場(18)
- 18 技術への過度の依存(15)
- 19 ヘッジ・ファンド(10)
- 20 無法(ごろつき)トレーダー(14)
- 21 事業継続(23)
- 22 リテール営業活動(20)
- 23 利益相反(21)
- 24 バックオフィス(19)
- 25 環境リスク(25)
- 26 支払決済システム(27)
- 27 マネー・ロンダリング(24)
- 28 合併・再編(28)
- 29 規制過少(29)
- 30 新規参入者からの攻勢(30)

世界経済の見通しに関する悲観論

リスク感覚を形成する決定的な要因は世界経済の現在の状況です。**マクロ経済動向**(第4位)に関する回答者のコメントは広範にわたり悲観的で、最近回復の兆しが見えるとしてもそれは弱々しく、危機再発にも脆弱であるとみています。そのことによって、**信用リスク**(第2位)が高い順位を占めているのが説明できます。危機が生み出した真のコストとして更なる損失、すなわちリセッションの影響が遅れて借手の負担となる過程で損失の増加が見通されるからです。

流動性リスク(第5位)は、2008年半ばに実施した前回調査時の第1位から順位を落としましたが、依然高水準の懸念として残っています。しかし、ほかの市場、特に**デリバティブ**(第7位)、**クレジットスプレッド**(第9位)、**株価**(第10位)を巡る緊張状態は緩和されています。リスクが上昇していると見られる市場は**為替**(第13位から第11位に上昇)市場であり、特に米ドルの将来に関心が集中しています。**金利**(第9位から第14位に下降)の見通しに関しては懸念が弱まっています。劇的な金融緩和環境にあって、金利の急騰は何時発生してもおかしくありませんが、それを予測することも可能です。もうひとつ目立った順位下降を見せたのは、**アグレシブな活動**が影を潜め、金融安定に対しては銀行そのものに比べれば脅威は小さいと言う認識が広まった、**ヘッジ・ファンド**(第10位から第19位に下降)関連リスクです。

資本調達には大きな懸念

バナナスキン・シリーズに初登場の**資本調達**(第6位)はバランスシートの再構築に挑む銀行には高リスク分野と見られています。危機の最中にも多くの大規模な資本調達が行われましたが、投資家の関心は弱まる可能性があります。また、政府が中期的にその持株の売却を試みることも売り圧力を強める結果となります。

大きな順位変動を示した懸念事項

リスク上昇

政治的関与: 商い上の判断を歪め、モラルハザードを発生させる。

規制過多: 危機に対する過剰反応。

資本調達: 巨大な需要、減退する投資家の意欲。

企業統治(コーポレートガバナンス): 銀行は危機から教訓を学びとるか？

為替の変動: 米ドルの変動に対する懸念。

リスク下降

流動性: 1年前は問題であったが、今は問題ではない。

クレジットスプレッドの変動、デリバティブ、株価変動、金利変動: 市場は平常化へ。

ヘッジ・ファンド: リスクに関しては監視レーダー画面から外れている。

バックオフィス: 危機の際は十分役割を果たした。

不正と無法トレーダー: 危機の時ならば予想される水準を下回る事件発生件数。

銀行が直面するリスクには、銀行みずからが発生させたものもあります。**リスク管理の質**(第 8 位)に関する懸念は、過去 2 年間に蒙った悲惨な損失を受けて、高い順位に留まりました。不十分な**企業統治**のリスクは急激な上昇(第 16 位から第 12 位へ)を示し、**経営者のインセンティブ**(第 16 位)は重大懸念として残っています。ただ、このリスクについては、(大雑把にいて)外部からの干渉とみる銀行関係者と、不適切なインセンティブが過度のリスクテイクに火を付けたとする銀行以外の回答者との間で意見がわかれています。金融機関内部における**利益相反**に関する懸念は弱まっています(第 21 位から第 23 位に下降)。企業統治をリスクと回答する者の多くからは、銀行が**危機から教訓を学ばず**、これまでどおりのビジネスに戻りたいと躍起となっていることに對する懸念が感じ取れます。

国際的関心の強まりはあるものの「環境リスク」への懸念は低水準

オペレーショナル・リスク分野では、経験則により景気後退時にはリスクが上昇するとされている二つのリスクである**不正**(第 11 位から第 15 位に下降)と**ごろつきトレーダー**(第 14 位から第 20 位に下降)に関する懸念が順位を落としています。これらのリスクに対する回答順位は、調査直前に発生した事件件数の影響を受けるものであり、最近そのような事件がほとんど発生していないからでしょう(マドッフによる詐欺事件は厳密には銀行関連の不正ではありません)。かつてはバナナスキンで主要トピックであった**バックオフィス**、**支払決済システム**、**事業継続**の各リスクに関する懸念は、大幅に下降しました。**マネー・ロンダリング**の順位も下落(第 24 位から第 27 位)しており、これは今や金融リスクというよりもレピュテーション・リスクと見なされています。コペンハーゲン・サミットは盛り上がりを見せましたが、**環境リスク**(第 25 位)の順位に変動はありませんでした。

また、**新規参入者からの攻勢**(第 30 位)は業界にとりリスト上最小のリスクと見られていますが、回答者からは、政府による救済と規制当局による高い参入障壁による銀行間競争の緩和と銀行による現状肯定の姿勢の持つ危険に関する意見が多く聞かれました。**合併・再編**のリスクに対する回答(第 28 位)が示すように、構造変化の可能性は限られているものと見られます。

回答の分布には主要バナナスキンに関し、銀行関係者と銀行以外の回答者の間に、極めて高いレベルでの意見の一致が見られました。敢えて微妙な差異を探せば、**銀行関係者**が主として危機が招いた政治的且つ規制上の情況に対し懸念を示していることに対し、**銀行以外の回答者**は銀行が自らの改革をおろそかにして、またもや新たな危機に向かって突き進んでいくのではないかと懸念しています。**規制当局**はバランスシートの質とリスク管理の質に関心を寄せています。**地域的には**調査対象である北米、ヨーロッパ、アジア・太平洋の 3 地域の間で著しい類似性が見て取れました。いずれの地域でも、政治的関与、規制過多、信用リスクが業界の直面する最大の危機であると考えています。

銀行のリスクに対する備えは十分とした回答者は僅か9%

危機への備え—われわれは回答者に対して指摘したリスクに対する銀行の備えはどの程度であるか、との質問をしました。「十分」とした回答は僅か 9%に過ぎず、11%は「不十分」と回答しました。それ以外の回答者は「どちらとも言えない」としています。これは、前回「十分」した回答が24%、「不十分」とした回答が僅か 4%と比較しても、よりネガティブな結果です。

調査参加者別懸念項目（立場／地域等の違いに応じた差異）

銀行関係者、銀行を外から見ているオブザーバー、規制当局は大きなリスクに関して意見が一致していますが、詳細になると意見を異にします。なお、443名の回答者のうち、銀行関係者は62%、オブザーバーが32%、監督者が6%を占めています。また、国別では、英156名、露31名、米29名、独・スイス各17名、加16名、豪11名、日4名等となっています。

銀行関係者—商業銀行、投資銀行役職員

1. 政治的関与
2. 規制過多
3. 信用リスク
4. 流動性
5. デリバティブ
6. マクロ経済動向
7. 資本調達
8. リスク管理の質
9. クレジットスプレッドの変動
10. 株価の変動

銀行関係者は、景気後退期に貸出を強制するというようにビジネス上の判断を無視する圧力を生み出す**政治的関与**をリスクのリストの最上位に挙げました。金融危機に対する規制の過剰反応に関する懸念はこれと密接に関連しています。銀行関係者の懸念には、不良債権が積みあがる中での信用状況の見通し悪化と、新規資本調達の可能性が含まれています。流動性リスクとデリバティブ市場、特にクレジット・デフォルト・スワップに関する懸念は引続き高水準となっています。

オブザーバー—アナリスト、コンサルタント、学者を含む銀行以外の回答者

1. 政治的関与
2. マクロ経済動向
3. 信用リスク
4. 規制過多
5. 資本調達
6. リスク管理の質
7. 流動性
8. クレジットスプレッドの変動
9. 為替の変動
10. 株価の変動

銀行以外の回答者は、銀行関係者同様、**政治的関与**に対する懸念を示しています。ただしその理由は、銀行とは異なり、銀行救済により発生する銀行のモラルハザードを懸念し、銀行が危機から教訓を学んだかどうか不安を持っています。彼らはまた、銀行の不良債権問題が終わりを告げたか、またリスク管理を十分に行なっているかに関して疑いを持っています。銀行以外の回答者は主要回答者グループ中で最も経済見通しに関して悲観的で、景気の「二番底」を恐れています。

規制当局者—監督当局者、政府関係者

1. 信用リスク
2. 政治的関与
3. 流動性
4. 為替の変動
5. マクロ経済動向
6. クレジットスプレッドの変動
7. 企業統治(コーポレート・ガバナンス)
8. 商品価値の変動
9. リスク管理の質
10. 資本調達

景気後退の影響が借手におよび、金融市場に依然不確定要因が漂う中で、不良債権多発が予想されること(**信用リスク**)が規制当局への懸念をおさえて最上位を占めています。流動性、クレジットスプレッドの変動、商品価値の変動の各リスクも上位を占めています。規制当局も政治的関与を懸念していますが、その理由は、政府がいかなる状況下で何時支援を引上げるかが不確定であることによります。危機により明らかとなった銀行の企業統治の脆弱さにも懸念を抱いています。

主要地域間で指摘するリスクは共通していました

北米

1. 政治的関与
2. 信用リスク
3. 規制過多
4. 流動性
5. マクロ経済動向
6. リスク管理の質
7. 企業統治(コーポレート・ガバナンス)
8. デリバティブ
9. クレジットスプレッドの変動
10. 資本調達

救済と公的支援を通じた政府による銀行セクターへの介入は、北米、特に米国で、リスクのリストの最上位を占めています。カナダの銀行は規制当局の過剰反応への懸念をより強く持っています。両国銀行セクターがもつ差し迫った懸念は、正に危機がもたらす副作用に関するものです:すなわち、信用と流動性に関するリスクと脆弱な経済回復見通しです。資本調達に関する懸念は、欧州に比べ小さくなっています。

欧州

1. 政治的関与
2. 信用リスク
3. マクロ経済動向
4. 規制過多
5. 資本調達
6. 流動性
7. リスク管理の質
8. クレジットスプレッドの変動
9. デリバティブ
10. 株価の変動

欧州でも、銀行に対する政府の関与に深い懸念を持っています。特に多くの事例があり、回答者数も多いイギリスでは、その傾向が強く現われました。これと密接に関連しているのが規制当局の過剰反応に対する懸念で、特にブリュッセル(EU)の過剰反応に対しこの懸念が強く示されました。これ以外で上位に位置する懸念は、信用リスク、資本調達、流動性、クレジット・デリバティブ市場と言った危機関連の問題が中心でした。多くの回答者が経済に関しては悲観的な感じ方をしており、経済回復は長期を要する険しい道のりであろうとの懸念を持っていました。

アジア・太平洋

1. 規制過多
2. マクロ経済動向
3. 信用リスク
4. 政治的関与
5. 為替の変動
6. 商品価値の変動
7. 流動性
8. 技術への高(過)度依存
9. デリバティブ
10. 不正

この地域の回答者には、日本、オーストラリア、東南アジア、インドが含まれ、種々のリスクに晒された広い範囲のグループです。回答内容に関して顕著であったのは、特にオーストラリアで見られた、規制当局の過剰反応に対する強い懸念と、主としてタイガー・エコノミーにおけるバブル崩壊と信用市場の崩壊の惧れを理由とした悲観的な経済見通しです。この地域では不正のリスクと銀行システムの技術への高(過)度の依存にも関心が寄せられていました。

先進国と新興国はそれぞれ異なる懸念を持っています

先進国

1. 政治的関与
2. 規制過多
3. 流動性
4. 信用リスク
5. マクロ経済動向
6. 資本調達
7. リスク管理の質
8. クレジットスプレッドの変動
9. 企業統治(コホレント・ガバナンス)
10. デリバティブ

先進国での懸念は、危機のもたらした好ましからざる結果に集中しています:すなわち、政府による(銀行)所有と支援の影響と、それに起因する政治的締め付けで、銀行システムを破壊するおそれがあると見られています。銀行にとり最も差し迫ったリスクは、やはり信用関連であり、不良債権がまたもや増加し、最近改善したとは言え、流動性に関する困難な状況が続くことにあります。資本調達も(新興国に比べ)高いリスクポジションです。経済回復にも警戒感があります。

新興国

1. 信用リスク
2. クレジットスプレッドの変動
3. マクロ経済動向
4. 為替の変動
5. リスク管理の質
6. 不正
7. 政治的関与
8. 株価の変動
9. 規制過多
10. 資本調達

新興国での最上位を占める懸念はすべて危機を原因とする金融面のプレッシャーに関連しています:すなわち、不良貸出と市場における難しさです。マクロ経済見通しに関するリスクは、たとえば経済が脆弱なロシア、「バブル」蓄積の懸念のある極東に関して、強くなっています。一方、政治や規制によるプレッシャーに関する懸念は、先進国ほど強くありません。不正が高い順位になっていることが目立ちますが、これも経済の下降傾向が原因となっているようです。

バナナスキン： 1996-2010 トップ・テン

	1996	1998	2000
1	お粗末な経営	お粗末な経営	株式市場崩壊
2	EMU 騒動	2000 年問題	E コマース
3	ごろつきトレーダー	お粗末な戦略	資産の質
4	過当競争	EMU 騒動	新技術の理解
5	不良貸付	規制	技術への高(過)度依存
6	新興市場	新興市場	銀行市場供給過剰
7	不正	新規参入者	合併・再編
8	デリバティブ	クロスボーダー競争	経済過熱
9	新商品	商品価格設定失敗	新規参入者からの攻勢
10	技術面の混乱	技術の理解	複雑な金融商品

	2002	2003	2005
1	信用リスク	複雑な金融商品	規制過多
2	マクロ経済	信用リスク	信用リスク
3	株式市場	マクロ経済	企業統治
4	複雑な金融商品	保険	デリバティブ
5	事業継続	事業継続	ヘッジ・ファンド
6	国内規制	国政的規制	不正
7	保険	株式市場	為替の変動
8	新興市場	企業統治	技術への高(過)度依存
9	銀行市場供給過剰	金利の変動	リスク管理
10	国際的規制	政治的関与	マクロ経済動向

	2006	2008	2010
1	規制過多	流動性	政治的関与
2	信用リスク	信用リスク	信用リスク
3	デリバティブ	クレジットスプレッド	規制過多
4	商品	デリバティブ	マクロ経済動向
5	金利の変動	マクロ経済動向	流動性
6	技術への高(過)度依存	リスク管理	資本調達
7	ヘッジ・ファンド	株価の変動	デリバティブ
8	企業統治	規制過多	リスク管理の質
9	新興市場	金利の変動	クレジットスプレッド
10	リスク管理	ヘッジ・ファンド	株価の変動

バナナスキンには現われては消えるものもある一方、長年にわたりリストに留まり続けるものもあります。上記トップテンは、この十年余りで銀行の持つ懸念がいかに変化してきたかを示しています。1990年代は戦略問題が中心でした：それは新しい形態の競争と技術、EMUのような劇的な展開、インターネットと2000年問題等です。これらの多くはすでに重要性を失い、経済的且つ政治的リスク、特に規制の増加に対する懸念、により取って代わられました。2000年以降の期間はデリバティブとかヘッジ・ファンドとか、新種のリスクが登場してきました。ヘッジ・ファンドは2005年が初登場です。危機の最中で行われた2008年調査では、信用リスクと市場リスクに鋭く焦点が絞られ、流動性とクレジットスプレッドという二つの新顔がリストの最上位に押し上げられました。今年の調査においては、長引いている信用問題や資金調達問題のような危機の残した余波に対する懸念に加え、世界経済の現状と政府の銀行セクターへの介入に関し浮上してきた疑問が感じ取れました。

以 上